

鳥越覚生『挨拶の哲学』春風社、2024年

本書は、著者第二の単著である。博士論文をもとにした『佇む傍観者の哲学 ショーペンハウアー救済論における無関心の研究』（晃洋書房、2022年）の続編と言える内容であり、佇み傍観することと挨拶をつなぐ考察が第一部を占める。ショーペンハウアーを土台としつつ、漱石、ゲーテ、イエス、パスカル、レヴィナス、フランクフルトそして文化人類学者の岩田慶次などを参照しながら進められる。

生きようと走り回ることから、無目的に散歩し、立ち止まり、佇み、傍観することでエゴイスティックな欲求から人は解放される。言い換えれば、現実に関与する（己の利害関心を追求する）のでなく無関心になることが救済になる。ショーペンハウアーから得られたこの観点から、自己意識の閉域を出て他者や世界に出会う事へと考察は進む。横臥と散歩（第1章）、ゲーテやショーペンハウアーの色彩論（第2、3章）、世界の眼（Weltauge）をめぐるハイデガーとショーペンハウアー（第4章）、横たわることなく祈り続けたイエスとそれをめぐるパスカルの断章（第5章）が続く。レヴィナスは複数回参照されるが、第5章の最後で挨拶を巡るレヴィナスの言葉が引用される。

第二部では、挨拶、より正確には自然世界全体への挨拶という事柄について、著者はブーバー、臨済宗の僧侶山田無文（1900-1988）、昆虫学者の小松貴（1982-）、まどみちお、エリ・ヴィーゼルとともに立ち止まり思索する。利己的な関心から世界を欲求の対象として見るのではなく、立ち止まって世界をありのまま傍観することで、その美しさが見えてくる。挨拶はその出会いにおいて交わされる、「大自然と（の）感応」（p.175）である。

全編を通じて、独自の文体の妙味に読者はしばしば立ち止まるだろう。著者の仏教に関する造詣を反映した語彙も見られる。その意味で、単なる西洋哲学の研究論文集ではない。

評者としては、取り上げられている事象自体に興味をそそられた。たとえばゲーテの色彩論、特に暁の裏の色彩は、中沢新一『精神の考古学』（新潮社、2024年）におけるスカイゲイジングやゾクチェンの暗闇での修行を思わせる。自己の身体を通じて、自分もその一部である宇宙とながるという発想は近代以前の世界には、人類に共通して見られたのではないかと思わせる。

＊

短い書評では本書の魅力を余すことなく伝えることはできない。ここではレヴィナス研究の観点から気になったことを書き留めておきたい。

いくつかの点で、本書の考察はレヴィナス思想と重なる。世界の中にある場所を占め、身を横たえ（漱石的に言えば横臥し）、眠れぬ夜、夜の底から抜け出て眠りに落ちることで、自我は非人称のイリヤの夜を脱し、主体として成立する。『実存から実存者へ』のこうした考察のベースには、カント的な認識主観が成立する以前の、身体としての自己が世界とのどのような関係によって成り立つのかという、超越論的身体論がある¹⁾。本書が論じるショーペンハウアーの身体論（p.103-108）をなぞるようだが、ショーペンハウアーをニーチェ・フロイト的な生の思想ではなく、カント・フィヒテ的な自我の統覚論の系譜に位置付ける研究もあるという²⁾。

また、佇むことがもたらす無関心 *Interesselos* な態度は、自我中心性からの離脱である限りでは、レヴィナスの没利益性 *désintéressement* と重なる。しかし、ショーペンハウアーの無関心は他者への関心ではなくむしろ他者に対しても無関心なので、倫理的な困難に直面する。漱石読解で示されている、無関心に美の世界に浸る主人公の倫理的葛藤がまさにこれを例証している。対してレヴィナスの場合、*désintéressement* は同時に、他者への無関心ならざること *non-indifférence* でもあり、これとは異なる。ショーペンハウアーにおける他者への気遣いはどこから来るのか？

これを説明するのが第四章 3.3「救済への道」だ。地に足をつけて佇むことで、普段は見えない自分のエゴイズムが見えてくる。認識主観は利己を映し出し、これを抑制するように助言する。ここに心身の変化 *Sinnesänderung* がある。しかしそれは、生きる意思の否定ではなく、これまで欲求してきたものを欲求しないこと *nolle* である。これは、レヴィナスの言う、自らの口からパンを引き剥がすことに重なる。

レヴィナスだと、他者による審問が自我を問いに付すのに対し、ショーペンハウアーでは世界に佇むことによる自己認識の変化が自我を問いに付している。ショーペンハウアーには分離された他者はおらず、むしろ自我自身が世界の目となることで、自我と分離する。自我の審問という結果は重なるが、そこに至るプロセスは異なる。では、このプロセスが自我の救済でもあるというのだろうか。孤独から、他者との出会いに至るとは言えるが、レヴィナスはそれを救済とは呼ばないのではないか。救われるべきはあくまで他者だからだ。この、佇む人が見る無関心な美の世界は、漱石やショーペンハウアーにとっては、世界の苦悩から抜け出せる手段となる³⁾。この辺りは美／善 *kalon* よりも善 *agathon* を重視したレヴィナスとは重ならないだろう。

本書は、自我の生命を成り立たせる世界との挨拶についての考察を全体として展開しようとしている。評者もまたここ数年、人間と自然世界の交感について、安藤昌益や日本画家東山魁夷の文章、ブラジルの原住民思想家アイウトン・クレナッキを手がかりに考えてきたので、同じ山に別のルートから登ってきたより重装備の登山者に会ったような気になった。

とはいえ、こうした種類の挨拶は、レヴィナスの思想の中には占める場所がないのではないだろうか。糧や住居の哲学は確かに、人間が「はらわた」で感じる世界についての考察であり、世界への挨拶の基盤を哲学的に説明するものである。とはいえ、人間が自然世界に向ける意識にレヴィナスが見て取るのは、挨拶ではなくむしろ異教のリスクである。

この「はらわた」の世界に肉薄するため、自然科学の知見が生かされ、ショーペンハウアー読解と違和感なくつなぎ合わされている。加えて、アニミズムに関する研究で知られる文化人類学者で、晩年は著者が現在勤める大谷大学でも教鞭をとった岩田慶次が全編を通じて参照されている。岩田思想が、宇宙と挨拶することで世界に佇み、利害関心から逃れるというショーペンハウアー的境地の解釈を下支えしている。

しかし、繰り返しになるがこれこそがレヴィナスにない観点で、スピノザ的な自然＝神論に通ずる。宇宙の目になる、宇宙に挨拶する、こういった世界観は上述の異教のリスクや、レヴィナスが後期ハイデガーを念頭に、厳しく指弾したもののようにも見える（ただし厳密にそう言えるかどうかは検討が必要だろう）。

とはいえ、自然から生まれた人間は、どんなに都市化した環境で生きていようと、自然の産物であることには変わらない。宇宙の中に人間を位置付け、宇宙との関係の回復により、むしろ本来の人間性を回復するという思想は、西洋であればストア派に顕著である。他方、レヴィナスが

注釈するラビ的ユダヤ教の教えには、こうした側面がほとんど見られない。確かに、聖なる土地の非難は咎められるが、それも、他人への非難をより一層咎めるための比較対象に過ぎない⁴⁾。

レヴィナスのこうした傾向は、彼の自然美に対する関心のなさ、ひいては美的経験それ自体に対する警戒心とも相関しているだろう。カントが判断力批判において指摘した、崇高さの経験がもたらす道徳的な啓発効果についての議論は、レヴィナス思想には見出せない⁵⁾。

挨拶は何よりもまず他なる人間と交わすものだが、著者自身の思索は、あくまでショーペンハウアーのラインに沿った宇宙との感応に向かっている。その過程でレヴィナスの思想に接続するポイントがいくつかあるとはいえ、ショーペンハウアー的な思想の展開の支えを、レヴィナスに見出すことは難しい。ただし、挨拶を救済への祈りとする解釈は、それが、己もその一部である宇宙への挨拶にも、己と分離された他者への挨拶にも適用可能である。最後に、本書が引く、レヴィナスによる挨拶の哲学の一節をみて書評を締め括りたい。

＊

著者が引くレヴィナスの一節、「「こんにちは」という挨拶は、他なる人間に当てられた祈りです」は、『他性と超越』所収のインタビュー「他者の近さ」⁶⁾に現れる。これは、インタビュー冒頭の質問⁷⁾に対する返答の末尾に現れる。この一節をより長く引用してみよう。

「あらゆる出会いは、こんにちは（*bonjour*）という言葉に含まれる祝福（*bénédictio*n）によって始まります。このこんにちはは、あらゆる我思う（*cogito*）、自己についてのあらゆる省察がすでに前提にするもので、第一の超越であるでしょう。他なる人間に向けられたこの挨拶（／やあ *salut*）は一つの祈りです（*invocation*）。ですから、私は他人に対する好意に満ちた関係の第一次性を強調します。」（*Altérité et transcendance*, Livre de poche, p.109）

ここには挨拶の言葉として *bonjour* と *salut* が挙げられている。*Salut* は親しい関係で使われる（「やあ」のような）挨拶であり、同時に名詞としては「救済」を意味する。祈りを意味する *invocation* は、*Trésor de la langue française* によれば、短い祈りを意味し、元々は神々に対してなされる祈りを指していた。レヴィナスの解釈によれば、挨拶には、出会った他人への祝福「良い日ですね」「救われている」が含まれる。ここに、自分ではなく他人への思いやりが最初にある。この日常茶飯事に潜む事実をレヴィナスは述べている。著者は、この箇所を引用する直前に「一切を思考する自己の限りなさを誇るのではなくて、地上に現前する他者の顔という高みと低みを思考せよ、とレヴィナスは説いている」（p.143）と書いている。評者は、レヴィナスの哲学を規範倫理的に読むことはできないと考えているので、レヴィナスが「そうせよ」と説いているとは思わない。レヴィナスはあくまで、日常的な挨拶の中に、他者のことをまず慮るという人間らしさが現れているという事実を見出している、と評者は解釈する。挨拶という（非自覚的な）習慣の中に自己に先立つ他者との感応があるならば、自然との日常的な触れ合いを失った人間が、自然との感応としての挨拶を失ったと考えられる。こうして感応としての挨拶を、他人と自然世界とを貫く連続的な現象として捉えることができるのではないだろうか。

＊

以上、レヴィナスに関連する箇所のみをピックアップしたが、本書が持つ思考の幅広さからすると、取るに足らない専門的な注釈である。レヴィナス研究の観点から気になることや、本書の議論が喚起するレヴィナスの読み方をいくつか列挙したに過ぎない。上述のように、評者としては宇宙への挨拶という大きな問いに取り組む著者の姿勢に敬服し、同様の問いに取り組む者として大いに啓発された。レヴィナスへの関心の有無に関わらず、多くの人に味わってもらいたい思索の記録である。人間であれ、動物であれ、虫であれ、植物であれ、地形であれ、「世界から余計なものを切り捨てる」ことをやめない人間が、そうしたことがむしろ「汚いからと言って自身の手足を切断するようなもの」（p.213）であることに気づかない現代に鋭く突き刺さる言葉に出会うことができる。この出会いを評者は祝福したい。

註

- 1) これについては次の拙論を参照。「Réduction lévinassienne de la philosophie moderne à travers les vécus marginalisés », Augustin Serrano de Haro (eds.), *Investigaciones fenomenológicas*, vol. Monográfico 4/II (2013) : Razón y vida, pp. 39-59. (<https://doi.org/10.5944/rif.4-II.2013.29773>)
- 2) p.117 註 8、酒井剛「ショーペンハウアーの自我＝身体論」『理想』第 687 号、理想社、2011 年、p.137。
- 3) ただし美の観点からは世界に関心を持っていると言えるので、純粋な無関心とは言えない。著者によれば、これを小田部は美的関与と呼んでいる（p.121, 註 47）。
- 4) Marlène Zarader, *Heidegger et les paroles de l'origine*, J.Vrin, 1990, p.12-13. Cf. 馬場智一『倫理の他者』（勁草書房、2012 年）p.392.
- 5) ただし自然の崇高さを体感している思えなくもない言葉もレヴィナスは残している。モロッコの高原にあるティウムリリンヌで開催された、大規模な国際シンポジウムに参加した時の報告で次のように述べている。「そしてわれわれユダヤ人は、ティウムリリンヌの僧侶たちが賞賛すべき自由さとともに身を置くことができたこの天空の風土（climat de hauteurs）のなかで、我が家にいるのではないだろうか。」（Levinas, Emmanuel, « Rencontres », *Cahiers de l'Alliance israélite universelle*, n°112; novembre, 1957, p.14.）
- 6) 初出は「La proximité de l'autre, entretiens avec Anne-Catherine Benchelah », dans *Phréatique*, 1986)。
- 7) 「あなたは『全体性と無限』のなかで「第一哲学は倫理である」と書いています。第一哲学は私たちの中でより人間的に切迫したもの全てに向けられているとおっしゃりたいのですか？」（*Altérité et transcendance*, Livre de poche, p.108）

（馬場智一）